

【2】

氏名(本籍)	楊麗雅(中国)			
学位の種類	文学博士			
学位記番号	博甲第694号			
学位授与年月日	平成元年7月31日			
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当			
審査研究科	文芸・言語研究科			
学位論文題目	文学作品における比喩表現の研究 ——夏目漱石の文学を通して——			
主査	筑波大学教授	利沢幸雄		
副査	筑波大学教授	柳沼重剛		
副査	筑波大学教授	赤祖父哲二		
副査	筑波大学教授	文学博士 平岡敏夫		
副査	筑波大学助教授	文学博士 内山知也		

論 文 の 要 旨

本論文は、研究しようとする作家の文学史的、伝記的な面というよりも、書かれている文学作品自体を研究対象にしようとする。文学作品には物語の構造論的な面と表現論的な面とが考えられるが、本論文はそのうち表現論的な面に視点を向け、表現の主軸と考えられる比喩表現を理論的に、さらに主として漱石の文章を通して実証的に考察研究しようとするものである。論文は「序論」「結語」「資料」のほか、5つの章からなっている。

序論：文学研究における比喩論の意義

1. 文学研究の方向
2. 本研究と漱石文学研究史との関連
3. 本研究の目的と構成

第1章：文学理論における比喩論

1. 日本・中国・西洋の比喩概念の比較
2. 日本と中国の古典文学論における比喩論
3. 比喩表現とイメージ・象徴
4. 喩体と文脈
5. 本論で扱う比喩表現の範囲

第2章：漱石の比喩論

1. 比喩の定義・分類

2. 文学における比喩のあり方
3. 比喩と作家の態度

第3章：漱石作品における比喩表現の役割

1. 比喩表現による登場人物のスケッチー『吾輩は猫である』の場面
2. 『草枕』の世界とその比喩表現
3. 主人公の過去と現在を貫く比喩表現ー『門』の宗助と御米の場合
4. 比喩表現と人物造形

第4章：比喩表現におけるイメージ研究

1. 夢
2. 着物と装飾
3. 動物
4. 植物
5. 戦
6. 絵画
7. 幽霊
8. 天文
9. 時候

第5章：文学表現としての比喩表現の特色

1. 比喩表現の諸相
2. 比喩と文学の他の諸概念との関連

結語

資料：漱石の比喩表現におけるイメージ

第1章では伝統的な日本、中国それに西洋の比喩の概念を比較することによって、3者の共通点と相違点を示そうとする。比喩は2つ、あるいはそれ以上の事物をならべ比較することによって、あることを説明したり悟らせたりするという共通点をもっている。比喩の代表的な種類とされるメタファー（隠喩）は語源的にことばの「移し変え」という意味をもっていることをわたくしたちは知っている。そのなかで、中国の「比」と「興」という1組の比喩用語の特徴的な位置が指摘される。「比」のほうは、本体（比較されるもの）と喩体と（比較するもの）との類似点がより客観的に考えられるのに対し、「興」のほうは、より主観的な関連によって結びつけられているというのである。これは文学作品における語り手の心情表出のことばとして、重要な働きをもつはずのものである。

第2章では漱石の文学論や文学評論などに書かれている比喩論の特色をとらえ、それが彼の作品にどのように反映されているかを考察している。漱石は比喩の役割について、(1) 情緒を転換する作用、(2) 表現を簡潔に印象的にする作用、(3) 幻想をうみ出す作用の3つを考えている。そして筆者は、自然景物が喩体として用いられると、単に本体で人事的材料を説明するだけでなく、本体にはない感興を催したりすることができるという漱石の考え方に、中国の比喩「興」と共通するも

のを認めている。

第3章では漱石の3つの作品について、比喩表現がいかに機能しているかを論じる。『吾輩は猫である』では、比喩が作中の戯画的な人物像とどのように関連しているかに関心が向けられる。『草枕』では、比喩表現がどのような詩的イメージをつくり出し、それらのイメージがこの作品の世界にどのような影響を与え、作品のテーマとどのように関連していくかが見られる。さらに『門』では、写実的といわれたりするこの作品の平坦な筆致による自然描写や作品の構成と比喩表現との関連を具体的に示しながら、比喩表現の重要な役割を論証する。さらに漱石の文学の特徴として、女性を描く場合、ある特徴に焦点をしばって印象的に描こうとしたり、見られる対象として描くことが多いが、そのためには比喩表現が欠くことができないものとして利用されていることが指摘される。

第5章は文学表現としての比喩表現について、一般理論的に整理しようとするものである。まず文学作品の言語を、意味的な喩と像的な喩の2つの機能をもつものとしながら、比喩表現自体のさまざまな様相を解明し、次に比喩と文学の他の概念との関連について論じている。ここで作品の文脈、作家の思想や世界観、作品の時空、作品の幻想や美などに、比喩表現が根元的な役割を果たすことが主張される。

審 査 の 要 旨

比喩理論は最近関心を集めている言語研究の1つであるが、旧修辞学としてよりも、日常言語にあって思考の様式と見なされることが多い。しかし文学言語としての比喩理論も当然可能なはずで、本論文は明治以来おそらく最も広く読まれてきた夏目漱石の文学作品を資料としながら、文学言語における比喩表現の意義を解明しようとしている。

文学作品の研究というと人物像やプロットなどについての物語論的な研究が一般的で、比喩表現といった言語面からのものは少ない。本論文で、近代における日本、中国、西洋の比喩表現についての了解を、ひとまず整理することからはじめたのはそのためであろう。この整理のなかでは、リチャーズの「本旨と伝達具」、漱石の「調法法」それに中国の「興」を取り上げ、それらがともに比較するものとされるものの融合のなかに、比喩の真価を見ようとしているといっているのは興味深い。

本論文の比喩論は、リチャーズやマックス・ブラックなど今世紀のメタファー論を取り入れている。これらの理論家たちは、リチャーズが「本旨、伝達具」、ブラックが「焦点語、枠組」といった用語を使い比較するものとされるものという構成要素の存在を前提として論をすすめる特徴がある。本論文では「本体、喩体」という用語が用いられているが、比較するものとされるものという考え方は共通している。比喩表現は本体を鮮明に理解させるために喩体を利用するというように、一般には考えられている。しかし本論文では喩体をたんに本体をよく理解させるための道具と考えることでは満足せず、もっと重要な働きをすると主張する。比喩は本体と喩体の相互作用のなかで生じること、さらに喩体のもつ情緒的な要素も本体に伝達されることがある。この考え方は日本や中国

の文学作品に多く用いられる自然の描写の意味を解明するのに有効である。事物を人や生きものにたとえる擬人法は比喩表現の1つだが、それとは逆に、人物や心情を事物にたとえる比喩も存在するはずである。こうした喩体のとらえ方は、自然についての表現が多い日本や中国の文学作品について比喩理論的に考えをすすめるのに役立つはずである。

本論文は現代の比喩理論、特にメタファー理論を解明しながら、その代表的な論とされている相互作用説を不十分とし、近代の日本や中国の比喩理論を参考にし、日本文学に多く見られる自然描写を比喩理論のなかに取りこんでいったことは特に評価でき、学位論文としての水準に達しているものと判断できる。今後はほかの近代の作家たちの文学作品における比喩表現を考察し、より実証的にこの理論を比較検討してみることが望まれる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。